

若年 I ターン者に見る「対抗」の変容

——1970年代から2010年代までの食と農をめぐる——

早稲田大学 須藤直子

1. 目的

本報告は、都市から農山村へ移住する若年 I ターン者を取り上げ、彼らの食と農の関わり方を1970年代から2010年代まで分析することで、若年 I ターン者の「対抗」の変容を明らかにするものである。これまで、都市から農山村への I ターン移住は、時代によって大きく変化してきたと論じられてきた。例えば、1970年代のヒッピーや対抗文化という文脈における「思想的」な移住、1980年代の公害や環境問題と密接に関連した「ライフスタイル的」な移住、1990年代以降の行政やNPOによって支援の対象となった「制度的」な移住である。しかし、どの時代においても、若年 I ターン者は常にさまざまな形で食と農に関わり続けており、これらの食と農をめぐる諸活動は I ターン移住の対抗的側面を示してきた。すなわち、I ターン移住の特質は、必ずしも上記のような単線的な変化として描くことができないのである。とはいえ、食と農をめぐる若年 I ターン者たちの「対抗性」とはいかなるものなのか。本報告では、若年 I ターン者の食と農をめぐる諸活動が I ターン移住の対抗的側面を示してきた一方で、食と農の関わり方の変化が、若年 I ターン者の対抗性の変容を反映していることを明らかにする。

2. 方法

①1970年代および80年代の若年 I ターン者と食や農の関わりについて、新聞記事、雑誌（『いなか暮らしの本』等）、移住者の体験記（加藤登紀子編、2009『農的幸論』等）の内容を検討し、彼らがいかにして食と農の分野に参入し、どのような活動を行ってきたのかを整理・分析する。そして、②1990年代以降の若年 I ターン者に関して、報告者が2006年より沖縄県本島北部で、2012年より埼玉県秩父地域で実施している「若年 I ターン者の移住経験とライフコースに関する面接調査」のインタビューデータを用いる。1990年代以降、食と農をめぐる若年 I ターン者の活動が、1970年代および80年代の若年 I ターン者たちといかなる点で共通し、また異なっているのかを分析する。

3. 考察と結論

新聞記事や雑誌等の内容分析においては、1970年代および80年代の食と農をめぐる若年 I ターン者が、先行研究ですでに明らかにされてきたとおり、高度経済成長期の国土開発や物質主義的な社会発展に対する明確な「対抗」という社会運動的側面をもっていることが改めて浮き彫りになった。その後、1989年に農山村への移住が「I ターン」として定着していく過程で、社会運動的側面は後退し、過疎対策や地域振興という側面が強調されていく。しかし、報告者が行った「面接調査」の分析において、上記の I ターン移住の制度化は必ずしも対抗性の欠落を意味しないことを見出した。1990年代以降の若年 I ターン者の多くは食と農の関わりを持続することで、対抗的側面を維持していたのである。とはいえ、この「対抗性」とは、70年代および80年代の形式を一部で踏襲しつつ、従来の「思想的」な移住から別の潮流として分岐してきたと考えられる。例えば、「脱物質主義や反都市」からは意識的に距離を取りつつ、日常生活や自営のカフェには積極的に地産地消やフェアトレードを取り入れる若年 I ターン者が出現している。この事態は、「都市か農村か」という二項対立図式のうち、片側の項を完全に否定するような1970・80年代型の対抗の形式から、両者の項の存在を認めつつ、場面や出来事に応じて臨機応変に対抗する先を取捨選択できる対抗の形式への変容を示しているのである。